コンピテンシー育成開発研究所比較日本学教育研究部門活動報告

【1】比較日本学教育研究部門運営委員会

神田由築（比較社会文化学）、浅田徹（比較社会文化学）、石井久美子（比較社会文化学）、埋忠美沙（比較社会文化学）、遠藤みどり（比較社会文化学）、加藤夢三（比較社会文化学）、大薮海（比較社会文化学）、竹村明日香（比較社会文化学）、田中琢三（比較社会文化学）、谷口幸代（比較社会文化学）、中野裕考（比較社会文化学）、難波知子（比較社会文化学）、藤川玲満（比較社会文化学）松岡智之（比較社会文化学）、宮内貴久（比較社会文化学）、湯川文彦（比較社会文化学）、西坂祥平（比較社会文化学）

第1回　令和5年（2023）4月21日
第2回　令和5年（2023）7月21日
第3回　令和5年（2023）9月29日
メール会議　令和5年（2023）8月7日
　　令和5年（2023）8月25日
　　令和5年（2023）12月5日

【2】比較日本学教育研究部門研究委員会

神田由築（比較社会文化学）、石井久美子（比較社会文化学）、埋忠美沙（比較社会文化学）、大薮海（比較社会文化学）、田中琢三（比較社会文化学）、竹村明日香（比較社会文化学）、中野裕考（比較社会文化学）、難波知子（比較社会文化学）、宮内貴久（比較社会文化学）、湯川文彦（比較社会文化学）

第1回　令和5年（2023）4月21日
第2回　令和5年（2023）7月21日
第3回　令和5年（2023）9月29日

【3】第25回　国際日本学シンポジウム

テーマ：わたしにお茶大がくれたもの
―あなたにとってはなんですか？―
主催：コンピテンシー育成開発研究所
　　比較日本学教育研究部門
日程：令和5年（2023）7月1日（土）
　　オンライン開催
【挨拶】佐々木泰子（お茶の水女子大学学長）
【司会】神田由築（お茶の水女子大学）
【問題提起】
　加藤厚子（本学卒業生）
　「『女子大』とは何か―女子大学をめぐる研究視角―」
　和田華子（本学卒業生）
　「史料が語る女子大学生の活動―お茶の水女子大学を事例として―」
　芹澤良子（本学卒業生）
「お茶の水女子大学の経験を活かす―聞き取りでつむぐ卒業生のあゆみ―」
【パネル報告】
　仲田秀（本学卒業生）
　「お茶大生協と私の大学生活―学生時代～定年後の大学院　結果として大学生協―」
　丸田孝子（本学卒業生）
　「小さなお役だちと大きな宝物」
　范淑文（本学卒業生）
　「私にお茶大がくれたもの―留学生活が帰国後の糧に―」
　土屋由里子（本学卒業生）
　「卒業して半世紀　いま思うこと―仕事と歌二刀流の人生を生きて―」
　原容子（本学卒業生）
　「『専業主婦？』は大忙し―たくさんの出会いに導かれて―」

【4】シンポジウム実行委員会

神田由築（部門長）

【5】第18回　国際日本学コンソーシアム

テーマ：「日本文化の中のバーチャル」
主催：コンピテンシー育成開発研究所
　　比較日本学教育研究部門
日程：令和5年（2023）11月4日(土)
　　オンライン開催
参加校：台湾大学、北京外国語大学・北京日本学研究センター、パリ・シテ大学、お茶の水女子大学

〇開会式
【挨拶】坂元章（お茶の水女子大学
　　コンピテンシー育成開発研究所所長）

〇日本語・日本語教育部会：
【コーディネーター】竹村明日香（お茶の水女子大学）
【司会】太田かのん、エルデネー・ビンディア（お茶の水女子大学）

土屋はる野（お茶の水女子大学）
「『朝ドラ』における夫婦間の呼称―関係性の変化に着目して―」
李禹錫（台湾大学）
「日本語におけるミラティブ性の表現について―ミラティブのタ形の意味用法を中心に―」
趙萱（北京外国語大学・北京日本学研究センター）
「対義形容詞『明るい』と『暗い』の意味的非対称性に関する一考察―アフォーダンスの視点から―」
黄鈺涵（台湾大学）
「紙芝居を音読教材として用いる試み―JFL日本語学習者を対象に―」
朱桂栄・彭子燕・楊鎔溪（北京外国語大学・北京日本学研究センター）
「中国の大学日本語教科書における登場人物の設計に関する研究」
加藤直子・Nguyen Van Anh（お茶の水女子大学）
「日本文化の中で高学歴移住女性のキャリア観はどのように変化するか―複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いて分析したベトナム人女性のインタビューを通して―」

〇日本文化部会：
【コーディネーター】神田由築（お茶の水女子大学）
【司会】須田華那（お茶の水女子大学）

邱冠禎（お茶の水女子大学）
「唐帝国への貢ぎ物について―踊り子を中心に―」
潘蕾（北京外国語大学・北京日本学研究センター）
「院政期の『乳母の家』の役割に関する考察」
バフヴァロヴァ・アナスタシヤ（お茶の水女子大学）
「近世西日本における遊女の動向―下関を中心に―」
大野舞（パリ・シテ大学）
「日本の『新書』の形が目指したものとその変遷」

〇日本文学部会
【コーディネーター】加藤夢三（お茶の水女子大学）
【司会】高萌（お茶の水女子大学）
曹怡（お茶の水女子大学）
「京極派歌人の「柳」詠考―水墨画との関係について―」
鄭子焜（台湾大学）
「夏目漱石『こころ』論―家制度から脱出するKの行動分析―」
洪瑟君（台湾大学）
「金子光晴の児童文学」
王一飛（北京外国語大学・北京日本学研究センター）
「フィクションにおける『核』のノンフィクション―『風の谷のナウシカ』と『モスラ』の怪獣表象―」

○全体総括
神田由築（お茶の水女子大学）

【6】コンソーシアム実行委員会
神田由築
（部門長、日本文化部会コーディネーター）
竹村明日香（日本語・日本語教育部会コーディネーター）
加藤夢三（日本文学部会コーディネーター）

【7】第6回　国際日本学講演会
テーマ：「『研究』と歩き回る―日本文学からあちらこちら―
日程：令和5年（2023）5月20日（土）
　　オンライン開催
講演者：森暁子（十文字学園女子大学）
司会：神田由築（お茶の水女子大学）

【8】第7回　国際日本学講演会
テーマ：「『研究』と歩き回る―心理学と私―」
日程：令和5年（2023）12月16日（土）
　　オンライン開催
講演者：堀内由樹子（お茶の水女子大学）
司会：神田由築（お茶の水女子大学）

研究プロジェクト活動報告

1. 演劇と出版文化

①主旨：演劇（歌舞伎を中心に）と出版文化の関係について、主に幕末から近現代の出版物（草双紙、読本、絵本、漫画など）を対象として研究をおこなう。

②プロジェクト担当者：埋忠美沙（本学教員）

③研究員：なし

④客員研究員：嶋崎聡子（UCLA）、松葉涼子（セインズベリー日本藝術研究所）

⑤研究協力員：宮崎眞帆（コロンビア大学大学院）メリッサ・リー（コロンビア大学大学院）、ビクトリア・デービス（UCLA大学院）

⑥活動経過：

「演劇と出版文化」をテーマに、歌舞伎を中心として演劇と様々な出版物との関わりを研究している。前記したメンバーの他、学外からもゲストを迎えて研究会にご協力いただいた。

4年目となる今年度は、定期研究会を開催した他、大学院科目「国際日本文化論」（担当：埋忠）において大学院生を対象にした講義をおこなった。

詳細は以下の通り。

1. 定期研究会

・4月20日（木）

・6月26日（月）

・6月30日（金）

・7月26日（水）

・10月13日（金）ゲスト：ニコル・ルーマニエール（大英博物館）

2.「国際日本文化論」講義

・6月26日（月）宮崎眞帆

・7月10日（月）嶋崎聡子

・10月12日（木）松葉涼子

・12月13日（水）ゲスト：仲川広樹（株式会社集英社）

2. 前近代日本の「中央」と「地方」 “Central” and “Local” in Premodern Japan

①主旨：前近代日本における政治・経済・文化の中心地は奈良であり、京都であった。そのため当該期の研究の多くは奈良や京都での事象を対象として行われ、その際に用いられる史料も奈良や京都で作成されたものが大半である。一方、地方においても一定度の史料は遺され、それを用いての研究も進められている。しかし、それぞれの研究は独立して行われ、そのまま完結してしまうことが多い。よって本プロジェクトでは、前近代の「中央」と「地方」それぞれの視点から研究を進めつつ、両者を融合させることにより前近代日本史像の総合的構築を試みる。

Nara and Kyoto were the centers of politics, economy, and culture in pre-modern Japan. Therefore, most of the research in this period focused on the events in Nara and Kyoto, and most of the historical materials used in those studies were created in Nara and Kyoto. On the other hand, a certain amount of historical materials have been left behind in local areas, and research using these materials is also being conducted. However, each study is conducted independently and is often completed as it is. This project, therefore, attempts to construct a comprehensive picture of pre-modern Japanese history by fusing the two, while conducting research from the respective perspectives of the “central” and “local” regions of pre-modern Japan.

②プロジェクト担当者：大薮海（本学教員）

③研究員：神田由築（本学教員）

④客員研究員：内田澪子（医療創生大学）、巽昌子（東京都立大学）

⑤研究協力員：東海林亜矢子（国際日本文化研究

センター)、永井瑞枝（本学AA)、柳澤京子（元本学院生）

⑥活動経過：

本プロジェクトは、メンバー各自で研究を進め、その結果を年度末に開催予定の研究成果報告会で発表することを予定している。本稿執筆が報告会実施前であるため、本プロジェクトに関係するメンバーの研究成果を個別に記載するにとどめる。

まず内田澪子は、「『極楽寺殿御消息』異本紹介と翻刻―国立歴史民俗博物館蔵「栄秀」本―」（『医療創生大学研究紀要』第4号〈通巻37号〉、2024年）を刊行予定である。これは、中央が圧倒的に主導してきた〈文字行為〉の、地方や周縁への拡がりの一端を掴もうとする試みである。また、柳澤京子は「長州戦争における物資調達―長州領内兵粮米を中心に―」（『地方史研究』第425号、2023年）を刊行し、東海林亜矢子は「『小右記』にみえる立后儀礼―穏座の成立―」（倉本一宏・加藤友康・小倉慈司編『『小右記』と王朝時代』吉川弘文館、2023年)、「摂関期の後宮」（伴瀬明美・稲田奈津子・榊佳子・保科季子編『東アジアの後宮』勉誠出版、2023年)、「円融天皇」「花山天皇」（樋口健太郎・栗山圭子編『平安時代天皇列伝』戎光祥出版、2023年)、「年上女性たちとの交流―源倫子と赤染衛門」「公卿たちとの交流―紫式部の男性の好みとは」（服藤早苗・東海林亜矢子編『紫式部を創った王朝人たち―家族、主・同僚、ライバル』明石書店、2023年)、「中宮定子・彰子―后の役割と実力」（倉本一宏監修『NHK大河ドラマ　歴史ハンドブック　光る君へ〈紫式部とその時代〉』NHK出版、2024年）などを刊行した。

最後に大薮海は、鎌倉末期から南北朝期の伊勢国の政治動向について概論を執筆し（ただし刊行は次年度予定)、それに関連する南北朝期の北畠氏の伊勢国司補任に関する論文を「南北朝合一直後北畠氏発給文書にみえる「両御代」」（『お茶の水史学』第67号、2024年）として発表予定である。いずれも、中央の政治対立と連動する地方の混乱を描き出したものである。

なお本年度は、研究成果の報告会とは別に「争いと「継承」」をテーマとして研究発表会を企画し、巽昌子「両統迭立・南北朝期の対立と醍醐寺報恩院における「継承」」と大薮海「両統迭立と伊勢神宮祭主職の継承」の2本の研究発表を行った。両報告を通して、中央寺社（醍醐寺報恩院）と地方寺社（伊勢神宮）が鎌倉後期から南北朝期にかけてどのように継承されていたのかを比較・検討した。

3. 英語・日本語における食べ物に対する感覚評価と文化的アイデンティティ
Sensory Evaluation of Food and Cultural Identity in English and Japanese

①主旨：日本語と英語における、食べ物に関する味覚や嗅覚などについての感覚評価の表現について分析する。それらが日英の文化的なアイデンティティ形成とどのように結びつくか等について、インタビューや会話等を材料として研究する。

We propose to investigate how people describe their taste preferences and experience food in English and Japanese. We will use interviews, surveys and sensory evaluative conversations to investigate how people do use verbal/nonverbal behavior to assess food, influence one another's preferences, and construct identities.

②プロジェクト担当者：石井久美子（本学教員）

③研究員：なし

④客員研究員：ポリー・ザトラウスキー（米・ミネソタ大学)、福留奈美（東京聖栄大学)、星野祐子（十文字学園女子大学）

⑤研究協力員：なし

⑥活動経過：

ポリー・ザトラウスキー先生が監修する英文論文集が2024年に刊行予定である。本年はデータ収集、および分析を主に行った。福留奈美先生は、上記の論文集に寄稿する「茶菓子の作り手と食べ手の重層的な隠れたコミュニケーション（仮題）」のための調査を実施した。具体的には、茶席に用いる茶菓子を通して、作り手（茶席の主人と和菓子職人）が菓子に込めた意図や命名した菓銘の意味等がどのように食べ手に受け取られるのか、茶道教授者、菓子職人、学生という3つの対象者に分けてインタビューを実施し、発話データを分析することとした。

また、本年度のプロジェクトに関わる研究成果は、下記の通りである。

【雑誌論文】

ポリー・ザトラウスキー（2023）「自然談話に見られる否定疑問文―形式、使用数、相互作用における機能」『日本語の研究』19.2.1-19

【講演】

Szatrowski, Polly. Negotiating inclusion and exclusion in Japanese food assessments with language and the body. Bayreuth Food and Language Talks. January 27. Bayreuth, GER. (invited) (online)

【学会発表】

Szatrowski, Polly. Stories in Japanese Taster Lunches. Presented at the panel entitled "Storytelling about and over food" for the 18th International Pragmatics Conference. July 10, 2023. Brussels, BELGIUM.

4. 哲学、倫理、宗教、科学思想に関する比較思想的研究

Comparative Philosophical Studies on Philosophy, Ethics, Religion, and Philosophy of Science

①主旨：日本人研究者と各国の研究者・留学生が協力して、日本、西洋、東洋の伝統思想や現代哲学の比較研究を行うことによって、日本思想、西洋思想、東洋思想の特殊性、独自性を浮き彫りにすると同時に、共通点についても理解をふかめる。さらに、人間の存在構造、認識構造の普遍性についても明らかにする。日本思想史、西洋思想史、東洋思想史の研究者の意見交換によって幅広い視点から問題を考察する。

②プロジェクト担当者：中野裕考（本学教員）

③研究員：なし

④客員研究員：なし

⑤研究協力員：鈴木朋子（東京都立大学）、小濵聖子（東京大学）、森上優子（文部科学省）

⑥活動経過：

本年度は、本プロジェクトで自主的に以前から行っている研究を継続することができた。

◆近代比較思想研究会：本プロジェクトの一環として研究会を定期的に開催した。近代日本の思想家を、世紀転換期の日本と西洋における思想の動向の中に位置づけ、その思想の特色や意義を明らかにすることを目的とする。月一回程度の研究会をオンラインで開催し、国内外の参考資料に目を通し議論を交わすとともに、学外における研究会報告、論文投稿などを行った。メンバーは森上優子氏（研究協力員）、鈴木朋子氏（研究協力員）、清水恵美子氏である。今年度も多くの思想家を取り上げ、その思想や信仰の相違点と共通点を浮き彫りにするため、テキスト分析や国内外の思潮との関係性などを検討した。

◆日本倫理思想輪読会：本プロジェクトの一環として、輪読会を毎月一回、オンラインで開催した。日本倫理思想史上で注目した文献の解釈を検討し合った他、関連知識の確認などで意見交換を行った。本年度も昨年に続き、折口信夫『古代研究Ⅰ　民俗学篇1』を対象とした。中心となるメンバーは、斎藤真希氏、頼住光子氏、髙島元洋氏、荒木夏乃氏、清水真裕氏、大持ほのか氏、阿部雅氏、飯田明日美氏である。学部生、院生、OG、教員など、幅広い関係者による読書会となった。

◆古事記（伝）研究会：本プロジェクトの一環として、日本思想の原点となる倫理思想を探求すべく『古事記』および本居宣長『古事記伝』を精読する研究会を6回開催した。大久保紀子氏、髙橋幸平氏、矢島壮平氏、中野裕考氏が自由にテキストに向き合い議論した。西郷信綱、神野志隆光らの現代の注釈、さらにはそれ以前の代表的な日本書紀注釈や古事記本文の諸本の異同も参照しつつ、多様な読解の可能性を探求した。

5. 明治・大正期の日独思想・文化交流の多角的研究

①主旨：北欧作家ラーゲルレーヴの日本における紹介者であるドイツの思想学者グンデルトと、その周辺の作家・思想家・知識人を中心に明治・大正期の日独思想・文化交流を研究する。
②プロジェクト担当者：田中琢三（本学教員）
③研究員：なし
④客員研究員：なし
⑤研究協力員：なし
⑥活動経過：
口頭発表
本研究プロジェクトと連携している研究会「プロジェクト人魚」が以下の研究発表会をオンラインで開催した。

1. 中園成生「日本におけるキリスト教受容の振幅」、プロジェクト人魚第66回研究発表会、2023年4月29日。

2. 平藤喜久子「多神教の諸相」、プロジェクト人魚第67回研究発表会、2023年7月23日。

6. 近現代における日本文化の特質 Characteristics of Japanese Culture in Modern Times：Characteristics of Japanese Culture in Modern Times

①主旨：近現代における日本文化の歴史的・現代的特性を明らかにする。
具体的には、政治、思想、経済、教育、生活などの多様な視点から、近現代の日本文化の形成・変容を描き出し、一連の分析結果を総合することによって、新たな研究の視点・論点を提起することとする。
In this research project, we aim to clarify the historical and modern characteristics of Japanese culture by examining the formation and transformation of Japanese culture in modern times. Specifically, from various perspectives such as politics, ideology, economy, education, and living, we will depict the dynamics of the formation and transformation of modern Japanese culture, and integrate a series of analytical results to provide new perspectives and issues.
②プロジェクト担当者：難波知子（本学教員）、湯川文彦（本学教員）
③研究員：宮内貴久（本学教員）、石井久美子（本学教員）
④客員研究員：馬場幸栄（一橋大学）
⑤研究協力員：なし
⑥活動経過：

本年度のプロジェクトメンバーの研究活動は、以下のとおりである。

(1) 書籍・論文等

・難波知子「小林孝子の『衣服標本』にみる近代日本の女性の衣生活（二）娘・孝子の洋服生活を実現させた母の洋裁講習の受講と婦人雑誌の影響」（『成瀬記念館』38号、2023年7月、16-31頁）

・湯川文彦「明治10～20年代における普通教育と職業教育」（お茶の水女子大学『人文科学研究』第20巻、2024年3月刊行予定）

(2) 学会発表・シンポジウム等

・馬場幸栄「国際極運動観測事業における機械式計算機の使用」（日本天文学会2024年春季年会、於東京大学本郷キャンパス／オンライン実施、2024年3月14日予定）

・湯川文彦「明治10～20年代における普通教育と職業教育」（教育史学会第67回大会研究発表、於北海道大学／オンライン実施、2023年9月23日）

(3) その他

・（博物館講座）難波知子「制服語り―学生時代の追憶と思い出の共有」第97回学習院大学史料館講座（オンライン）、2023年4月3日～6月3日

・（ラジオ）脚本・演出：詩森ろば、歴史監修：馬場幸栄、天文学監修：田崎文得、IBC開局70周年記念ラジオドラマ「計算の神様」IBC岩手放送、2023年12月25日

・（新聞）馬場幸栄「緯度観測所と地域の人々 第1回 趣味人・木村栄と謡曲」胆江日日新聞、2023年4月25日

・（新聞）馬場幸栄「緯度観測所と地域の人々 第2回 交流の場「南画」発表会」胆江日日新聞、2023年5月23日

・（新聞）馬場幸栄「緯度観測所と地域の人々 第3回 木村の肖像画と岩手の画人」胆江日日新聞、2023年6月27日

・（新聞）馬場幸栄「緯度観測所と地域の人々 第4回 第2代所長・川崎俊一とその家族」胆江日日新聞、2023年7月25日

・（新聞）馬場幸栄「緯度観測所と地域の人々 第5回 木村栄と誕生日の贈り物」胆江日日新聞2023年9月26日

・（新聞）馬場幸栄「緯度観測所と地域の人々 第6回 名誉市民・池田徹郎」胆江日日新聞、2023年10月24日

・（新聞）馬場幸栄「緯度観測所と地域の人々 第7回 苦学した統計学者・石川栄助」胆江日日新聞、2023年11月28日

・（新聞）馬場幸栄「緯度観測所と地域の人々 第8回 計算の神様・飯坂タミ子」胆江日日新聞、2023年12月26日

7. 謡伝書の日本語学的研究

①主旨：本研究では、中世後期以降に作成された謡伝書の記述を分析し、日本語学的な考察を加える。具体的には、室町末期から江戸期にかけての謡伝書の中から発音に関する記述を抽出・分析し、謡ではどのような発音を規範化し、指南しようとしていたのかを解明する。

今年度は特に、謡伝書の中の発音規範に関する内容を近世国学者らがどのように自著に取り込んでいったのかを明らかにする。すでに契沖や本居宣長が謡伝書の記述を部分的に取り込んでいることは明らかになっているが、今後はさらに、彼らが古代語の音声を理解する際に、謡伝書をどの程度参照していたのかを検討する。

②プロジェクト担当者：竹村明日香（本学教員）

③研究員：なし

④客員研究員：山田昇平（奈良大学）

⑤研究協力員：なし

⑥活動経過：

今年度は、竹村（本学教員）と山田（客員研究員）がそれぞれ独自に謡伝書について研究を行った。

竹村は、本居宣長が著書の『漢字三音考』(1785刊）に『塵芥抄』系謡伝書の四声観を取り込んでいることを明らかにし、研究発表を行った（「宣長と謡伝書――『漢字三音考』にみる四声観の摂取――」第二回文献日本語研究会、2023年1月)。本年度はその発表内容を論文化して投稿した。また契沖と謡伝書の関係についても研究し、契沖が『和字正濫鈔』(1695年刊）や『和字正濫通防抄』(1697年成)、『和字正濫要略』(1698年成）の仮名遣い書に、『塵芥抄』系謡伝書の四声観や音声学的用語を取り込んでいることを明らかにした。これらについては来年度に発表や論文化を行う予定である。

山田は四つ仮名について研究を行った。なぜ中世末期から近世中期にかけて四つ仮名に関する言説が文献上に頻出するのかという疑問を出発点とし、結論として、四つ仮名の関する言説は謡曲から歌学へと流入する形で流布したことを示した（「文献上にあらわれる発音規範の言説――何故、近接した時期の文献に四つ仮名記述が集中するのか――」第二回文献日本語研究会、2023年1月)。この研究発表は、本年度に論文化され、来年度の刊行の『語文（大阪大学)』に掲載される予定である。

本プロジェクトは数年にわたって行っているが、謡曲の発音規範が近世国学や歌学へと影響を与え、その知識が流入していった様を描き出すことに成功していると言える。

8. お茶の水女子大学と桜蔭会に関する多角的研究

①主旨：本研究プロジェクトでは、卒業生・同窓会・女子大学という3つの視点から「女子大学とは何か」を考察する。今年度は、国際日本学シンポジウム「わたしにお茶大がくれたもの―あなたにとってはなんですか？―」を企画、運営し、個人の視点から女子大学の歴史的意義と社会における位置づけを探る。

②プロジェクト担当者：神田由築（本学教員)

③研究員：なし

④客員研究員：なし

⑤研究協力員：加藤厚子（元本学院生)、和田華子（元本学院生)、芹澤良子（本学AA)

⑥活動経過：

今年度はプロジェクトメンバーが全員登壇し、本部門主催の第25回国際日本学シンポジウム「わたしにお茶大がくれたもの―あなたにとってはなんですか？―」において、報告を行った。

本年度の研究成果は、下記の通りである。

【シンポジウム報告】

・加藤厚子「『女子大』とは何か―女子大学をめぐる研究視角―」、第25回国際日本学シンポジウム、2023年7月1日。
・和田華子「史料が語る女子大学生の活動―お茶の水女子大学を事例として―」、同上。
・芹澤良子「お茶の水女子大学の経験を活かす―聞き取りでつむぐ卒業生のあゆみ―」、同上。

【論文など】

・神田由築・芹澤良子「総括」、お茶の水女子大学比較日本学教育研究部門『比較日本学教育研究部門　研究年報』第20号、2024年3月。
・加藤厚子「『女子大』とは何か―女子大学をめぐる研究視角―」、同上。
・和田華子「史料が語る女子大学生の活動―お茶の水女子大学を事例として―」、同上。
・芹澤良子「お茶の水女子大学の経験を活かす―聞き取りでつむぐ卒業生のあゆみ―」、同上。
・芹澤良子「『わたし』にお茶大がくれたもの―あなたにとってはなんですか？～2023年7月1日開催 第25回国際日本学シンポジウムより～」、お茶の水学術事業会「ellipse」第63号、2024年2月。

コンピテンシー育成開発研究所比較日本学教育研究部門
研究年報　研究論文投稿規定

本年報はお茶の水女子大学コンピテンシー育成開発研究所比較日本学教育研究部門の研究年報である。

1. 掲載資格

・投稿論文：投稿資格を有するのは原則として本部門員、及び研究プロジェクトの学内研究員、客員研究員、研究協力員とする。

・公開講演会、コンソーシアムなど、部門が行う各種催しにて講演、発表を行った場合、原則として論文（または要旨）を掲載する。都合により講演者、発表者自身が執筆できない場合には、各会責任者（セッション、部会などがある場合には、その責任者、以下「各会責任者」と記す）が抄録等を掲載する。

2. 原稿の査読

・投稿論文については、査読を行う。

3. 締切

・投稿論文は9月末日、その他講演会、シンポジウム等での講演、発表は開催後2か月以内とする。但し、12月に開催されるものについては別途指定する。1月以降に開催されるものについては原則として次年度の研究年報に掲載することとする。

4. 提出先

・論文は事務局（ccjs@cc.ocha.ac.jp）に提出する。その他、問い合わせがある場合は事務局へ連絡する。

5. 書式

・原稿は、規定の書式に基づき作成する。

・原稿の種類・枚数は以下の通りとする。

投稿原稿：15枚以内

講演・パネル原稿：10枚以内

研究発表：6枚以内

総括・概要：2枚以内

（いずれも、本文・注・図表を含む）

Microsoft Wordを使用

・用紙サイズ：B5判（182mm×257mm）

横書き、22字×38行

・余白：上下25mm、左右17mm

・本文：2段組み

・フォントは下記の通りとし、数字は原則として半角の算用数字を使用する。

	「明朝体」	「ゴシック体」
和文	MS明朝	MSゴシック体
英文	Times New Roman	Arial

・論文名：14ポイント「ゴシック体」左右中央

副題：10ポイント

・執筆者名：11ポイント「ゴシック体」右寄せ

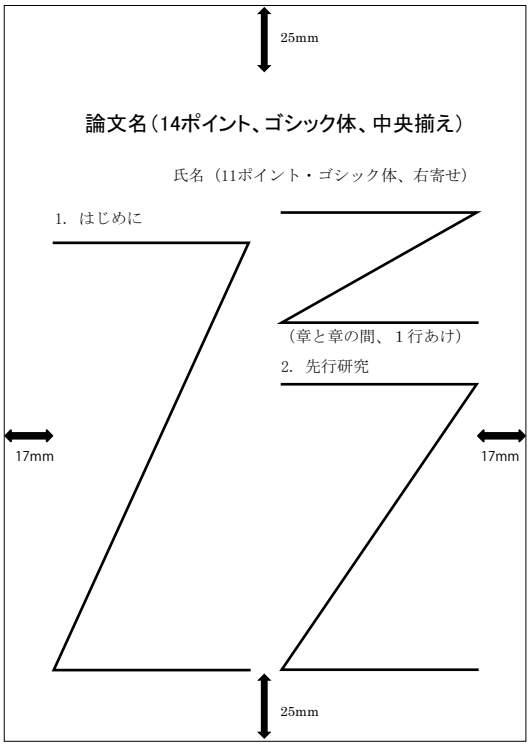
・本文：9ポイント「明朝体」

・注：8ポイント「明朝体」（文末注とする。）

・参考文献：8ポイント「明朝体」

・章と章の間のみ、1行あける。

・図表内の文字も原則として、本文に準じる。本文との間を1行以上あけること。



6. 原稿提出方法

・Wordの電子データを送付する。

・メールには日英両語で題目と氏名、連絡先（郵便番号、住所、電話番号）を明記する。

7. 使用言語

・使用言語は日本語とする。但し、何らかの理由により外国語で執筆することが認められた場合には外国語を用いることができる。

8. 校正及び注意点

・内容、形式面の校正は原則として著者校とし、著者が行う。原則として著者校は1校のみとする。

・事務局は原則として校正を行わない。

・校正は原則、電子媒体を通して行う。

・論文校正と並行し、目次の校正を行う。両者で論文題目や氏名の表記に不一致がないことを確認する。

・以下に該当する原稿は不掲載、または修正を求めることがある。

(a) 内容が本部門の活動趣旨になじまないと判断されるもの。

(b) 内容的に研究論文とは見なせないもの。

(c) 個人攻撃・差別的表現など、公的なメディアに掲載するには不適切と考えられる記述を含むもの。

(d) 極めて煩鎖な組版上の操作が必要であるもの。

9. その他

・投稿論文執筆者には、研究年報刊行時に2冊を贈呈する。抜刷は作製しない。

・著作権などの処理は原則として執筆者が行う。

・研究年報に掲載されたものは原則としてWeb（お茶の水女子大学教育・研究成果コレクションTea Pot）上で公開される。Webでの公開を希望しない場合は事前に事務局へ連絡する。

・同様の内容が報告書等に掲載される場合には、本研究年報をオリジナル原稿とする。

バックナンバーのご案内

『比較日本学研究センター研究年報』(第1～4号)、『比較日本学教育研究センター研究年報』(第5～13号)、『比較日本学教育研究部門研究年報』(第14号～)の掲載の論文(一部除外)は、お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション(https://teapot.lib.ocha.ac.jp)で公開されています。こちらをご覧ください。

編集委員より

今年度は「国際日本学シンポジウム」、「国際日本学コンソーシアム」、「国際日本学講演会」を開催いたしました。「国際日本学シンポジウム」および「国際日本学コンソーシアム」の掲載論文の題目は、一部、発表時と異なるものがあります。著者の方から提出された原稿の通りに掲載しました。表記などについては編集の都合上、編集委員で統一させていただきました。

『コンピテンシー育成開発研究所比較日本学教育研究部門研究年報』
責任者：部門長　神田由築
2023(令和5)年度編集委員　藤川玲満　芹澤良子　石田恵理

*本年報は、「「統合知」を創出し社会変革をもたらす「コンピテンシー」育成基盤の形成」による成果の一部です。